

## [014]九州人類学会報表紙奥付等

<https://hdl.handle.net/2324/2235359>

---

出版情報 : 九州人類学会報. 14, 1986-06-25. Kyushu Anthropological Association  
バージョン :  
権利関係 :

## 序 文

九州人類学研究会会長 江 淵 一 公

昭和60年度の九人研の年報『九州人類学会報・14号』が発刊の運びとなった。今号は御覧の通り例年に比べてかなり分厚くなっているが、これは昨年度総会の記念講演をお引き受け下さった荒木博之先生を初めとして、昨年度の各例会の報告者の方々が殆ど漏れなく期日までに原稿を提出して下さったからである。また今年は、3月例会で発表された恒例の文化人類学関係の修士論文を基にした原稿が例年に比べて多かったことも、ページ数が増えた一因である。その出来栄の程は読者諸賢のご批評に待つほかはないが、人類学に関心をもつ若い諸君が少しずつでも増えている現状を喜ぶたい。お忙しいなか原稿をおまとめ戴いた寄稿者各位に感謝の意を表したいと思う。

九州人類学研究会が発足して、今年（9月）で15年目を迎える。この間、毎年ほぼ確実にこの会報は刊行され、“年報”としての面目を保ってきた。こういう財政的基盤の弱い小さな組織がコンスタントに会報を発行するというのは、並大抵の苦勞ではない。財政上の理由などからやむなく、これまでに2度合併号を出す羽目になったことがあるが、しかし曲りなりにも今日まで続行することができたのは、ひとえに事務局・例会担当・編集担当運営委員各位の努力の賜物であり、そしてそれを支えて下さった九人研会員諸賢の御蔭だと思う。

この年報は月例会の報告論文（またはその要約）集であるから、毎月の例会がないことには成り立たない。慣例として、国外・国内調査に出掛ける会員の多い8月と年度末の行事の多い2月のふた月だけは例会を開催しないことになっているが、それを除けば、月例会を休んだことは九人研発足以来ただの一度もない。これは自慢していることではないかと思う。通算すれば既に140回ほどになる筈である。このように毎月の例会が滞りなく開催できたのは、歴代例会担当委員の努力に負うところが大きい。また、月例会会場を提供して下さっている九州大学教育学部の関係者の方々に対して、この場を借りてお礼を申し上げたいと思う。例会には多様な分野にわたる研究課題が提出され、毎回30名ほどの会員がコンスタントに出席して熱のこもった討議が繰り返されている。今後とも多くの会員の参加を得て、月例会が益々充実発展することを期待してやまない次第である。

昭和61年5月